

# 人文共同研究の醍醐味 ①

『パンテオン会雑誌』 公刊に寄せて

## 今橋 映子



駒場キャンパスに存在する大学院の組織や、教員の研究、あるいは学部前期課程の授業に至るまで、「学際性」は広く共有される理念の一つになっている。学際性とは旧来の専門研究の枠を取り払って、隣接諸学問の成果や視野を共有し、新たな地平を得ることだ、と先ずは了解される。それ

が、お題目でなく、本当に骨と肉の備わったものとして具現化することがいかに大変か——少しでもそれを試みたことのある研究者なら、それこそ骨身に沁みていることだろう。けれどもそこから得られる知的興奮や愉悦感は、また何にも代え難いことも確かである。

学際的研究は、一人の研究者の中で達成されることも多いが、一方で共同研究という形態を取ることもできる。逆に言うと、共同研究でなければ決して到達できないテーマがこの世には存在するのだ。とはいっても、(おそらく理系の学問とは往々にして異なって)完全に個が自立した形で研究を、とかく取りやすい人文研究、ましてや文学芸術研究での共同作業——私

は、この三年間、自分としては(本格的な形では)初めてそれに携わる経験を得る

ことができた。『パリ一九〇〇年 日本人留学生の交遊——『パンテオン会雑誌』資料と研究』(ブリュッケ、二〇〇四年)が、その成果である。『パンテオン会雑誌』と

は、一九〇〇年パリ万博を機に、現地に留学していた日本人たちが作った親睦会が発行した、手書き三号の回覧雑誌である。会の提案者は近代洋画家の黒田清輝と法学者の寺島誠一郎。会員には和田英作、浅井忠といった名立たる洋画家のみならず日本画家や詩人(土井晚翠)、法学、教育学、建築学、医学から陸軍関係者まで幅広く含まれる。まさにパンテオン会自体が領域を超える多彩色性を誇り、彼らは互いを仇名で呼び合っていたからか、たり、俳句の会を愉しんだりしている。その雑誌の内容もそれぞれ多種多様で、画家たちの繊細な水彩画や挿絵をはじめ、絵画と密に連動した俳諧、パリでの艶聞を巧みに織り込んだ漢詩、戯曲、歌謡、尻取遊び、近代的旅情を刻んだエッセイ、書道に関する演説風文章といった、近世から近代

に橋渡しするあらゆるジャンルに渡る作品が含まれる。果ては日本人による英語演説原稿やフランス語抒情詩。一九〇〇年当時の日・仏両国が植民地帝国であったことを伺わせる記事すら存在する。

これら全てが活字ではなく、何十人もの筆跡による手書きで書かれているわけであるから、翻字(≡活字化)作業から地道に始めねばならない。それに予想される作業と経費は膨大であり、少なくともこの資料の存在が再確認されてから二十年間近く、事が運ばなかったのも頷ける。

詳細は本書に譲るが、縁あって三年前、職場も専門も異なる二名のチームが立ち上がった時、(つちばり在住者一名、院生三名)何よりも新鮮であったのは、美術史/日本文学/比較文学・比較文化の共同研究が、本当に実現したということだった。次号でロバート・キャンベル氏(本学助教教授・日本文学)も報告してくれる予定だが、今回の共同作業の基盤には、

手塚恵美子氏(日本女子大学助手・近代日本美術史)が順次更新する諸資料が、いわば共有データベースとなっており、また各々が集めた情報は、

三年間の作業の中では、手塚恵美子氏(日本女子大学助手・近代日本美術史)が順次更新する諸資料が、いわば共有データベースとなっており、また各々が集めた情報は、

読めることが多い)の一つだにおろそかにしない。雑誌本体を調査した折には、紙をすかしてまで下から字句を確認するその執念に、素人の私などはほとほと感心してしまった。また現在の国文研究では貴重テキストの電子化が普通だが、今回もキャンベル氏の多大な努力の末に、CD-ROMを付帯することが可能になった。

一方美術史の専門技能は、雑誌内の水彩画や版画作品の技法、材質の判定や挿絵の手(≡画家)の特定などに生かされる。CD-ROM撮影は東京文化財研究所(山梨絵美子氏)の完璧な環境の中で慎重に行なわれ、特に、この雑誌の特殊な装幀の仕方にも注意が払われた。また、パンテオン会に縁の深い多数の画家たちの人間関係が、従来よく言われていた画壇の勢力地図と微妙にずれていること、あるいは装飾美術や絵葉書に彼らが関心を寄せている意味なども明らかになった。

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。新入生の大学生活に向けて、期待と同時に多少の不安もあることでしょうか。大学では、

決して互いの専門研究に敬意を失わず、全ての先行研究を無視することなく明示し、その上で広い視野や思いがけない議論、精緻な理論を提示することであると信じている。今回、この精神が特に若い院生の共同研究者たちに共有され、教員

と院生とは思えないほど公平、率直で自由な意見交換が交わされたと共に、作業の苦楽を共に出来たことを何よりも嬉しく思っている。(超域/フランス語)

決して互いの専門研究に敬意を失わず、全ての先行研究を無視することなく明示し、その上で広い視野や思いがけない議論、精緻な理論を提示することであると信じている。今回、この精神が特に若い院生の共同研究者たちに共有され、教員

と院生とは思えないほど公平、率直で自由な意見交換が交わされたと共に、作業の苦楽を共に出来たことを何よりも嬉しく思っている。(超域/フランス語)

と院生とは思えないほど公平、率直で自由な意見交換が交わされたと共に、作業の苦楽を共に出来たことを何よりも嬉しく思っている。(超域/フランス語)

読めることが多い)の一つだにおろそかにしない。雑誌本体を調査した折には、紙をすかしてまで下から字句を確認するその執念に、素人の私などはほとほと感心してしまった。また現在の国文研究では貴重テキストの電子化が普通だが、今回もキャンベル氏の多大な努力の末に、CD-ROMを付帯することが可能になった。

## 学生相談所 平石 界

電話(FAX兼) : 03 - 5454 - 6186(夜間は留守番電話)  
電子メール : soudanjo-komaba@park.itc.u-tokyo.ac.jp  
WEBページ : http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/soudanjo-komaba

